

明治天皇の御真影を描いたE・キヨソーネの生涯

聖徳大学教授

山口康助

ただいまご紹介にあずかりました山口康助でございます。高塩先生のお話はいへん面白く、会津藩のことも出ました。私は会津の生まれでございます。私の話は高塩先生のような資料に基づいての緻密な考証とは違ひまして、肖像画の話になりますので、多分に感性的な気分的なものになりそうで、初めからお断りしておきたいと思ひます。

まず明治天皇ご踐祚百三十年、慶応三年から百三十年でございますが、明治天皇のご真影のことは後程申し上げますことにしまして、起承転結、四分節ぐらゐに分けてお話をいたします。皆様に差し上げました一枚刷りの資料はジエノバ市のキヨソーネ美術館を訪ねた時、筆写してきた文章ですので、後程ご説明申し上げたいと思ひます。

一、明治政府の近代化政策とお雇外国人

まず三百年の江戸幕府が倒れまして、明治維新、新しい近代国家をつくろうとするとき、日本は大変でした。西洋

近代国家と同じような技術や制度につくり直さなくてはいけないというので、当時お雇い外国人と言い習わしておりますが、外国人を明治二、三年の段階で千五百人も雇っております。しかし、あとで申しますように非常に高い俸給を出さなくてはいけませんので、大蔵省も工部省も文部省もみんなお雇い外国人から短期間に技術や知識を吸収して、できるだけ早く外国人を解雇しております。その結果、明治三十年ごろには激減しまして、千人ぐらゐまで減ります。幕末から数えますと、総勢で六千人ぐらゐ外国人を雇っております。感心いたしますことは、その雇い方が非常に優れていることです。つまり外務省、工部省、内務省、大蔵省、陸軍省、海軍省、文部省、司法省、宮内省などの中央官庁がありますが、それが太政官に対してこういう人を雇いたいということを申請するわけですが、その選択が実にうまい。鉄道とか土木はみなイギリス人を雇っています。ほかの国からは雇ってきません。イギリスは蒸気機関発明の国であります。ですから、機関車、組立工あるいはレールの引き方といった鉄道技術は全部イギリス人を雇ってきます。陸軍は初めフランスでしたが、あとでドイツに替えます。海軍はすべてイギリスです。教育とか農業の分野はアメリカから雇ってきます。

どこの国からどういう人を雇ったらいいかという目利きは、オランダ人で幕末から日本に来て政府の顧問をしておりましたフルベッキあたりの智慧を借りたとは思いますが、やはり大久保とか岩倉とか伊藤とか、そういう日本の明治の首脳たちの目が利いたのだと思います。これは今日でも大事なことです。どこからどういう人を雇えばいいか。高い俸給を払うわけですから、大変なことだと思えます。

たとえば岐阜県の、東から木曾、長良、揖斐という三川の合流地点は江戸時代にも大氾濫をしまして、幕府は薩摩藩の平田鞆負つとみという家老を先頭に、百人の武士たちを徴発して木曾、長良、揖斐三川の分流工事をさせます。これを宝曆の治水といいますが、難工事のために五十人以上の武士たちが犠牲になり、平田鞆負も完成の暁に腹を切ってお詫びします。つまり薩摩藩に対してこれだけ人命をなくし薩摩藩の大金を使って申し訳なかったといって、総大将が

自刃するのです。そのぐらい苦勞のところでは。

ところが明治になりましてからも、あの木曾、長良、揖斐という三川は、長野県、岐阜県、飛騨の山奥から流れてくるものだから、しょっちゅう暴れる。あまりに川が暴れるものですから、その隙間、隙間にみんな石垣を積んで輪中という集落がたくさんできる。そういう状態の中で、明治になってからもまた木曾、長良、揖斐の三川は暴れ回ります。とうとう明治政府は明治十年にオランダからデレーケという技術者を雇ってききます。なぜオランダかというと、オランダは行ってみればわかりますけれども、国土の三分の一が海水面より低いところなんです。全部堤防で国を守っている。そういう国ですから、土木技術、灌漑技術が非常に発達している。ですから、木曾三川の改修をするためには、イギリスから雇うのではない、フランスから雇うのではない、いちばんそういう技術の発達しているオランダから雇ってきている。これは大変な目利きだと思います。そういうふうには明治政府は適材適所に外国人を投入して、それぞれの仕事を進めていきます。

いまデレーケの話をしてきましたが、デレーケが帰国したあとは、ファン・ドールンが継ぎました。そして福島県の猪苗代湖から東のほう、郡山、須賀川、あのへんが安積平野ですが、水がなくて困っていた。そこで、猪苗代湖から二十キロの安積疏水あさかそすいをつくって水を引く。これはファン・ドールンの設計と施工です。いまファン・ドールンの銅像が猪苗代湖の十六橋いざはしのふもとに建っています。戦争中、この銅像が金属供出ということで撤去されそうになった時、地元の人はいっしょにそれを土中に隠して、戦争が終わってから掘り出して建て直したといひます。そういうこぼれ話があちこちに残るほど、日本全国にわたってお雇い外国人が明治の日本の開発に努力してくれたわけです。

さて、そのお雇い外国人の給料ですが、非常に高給だったんです。一例を挙げますと、明治三年にイギリスから八人の鉄道技師を雇いました。明治三年から工事を始めまして、明治五年に、いまの新橋の汐留から横浜の桜木町まで二十八キロの鉄道が敷かれます。「汽笛一斉新橋をはや我が汽車は離れたり」という「鉄道唱歌」の出だしでよくご

存知です。これを担当したのがイギリスのエドマンド・モレルという技師長です。この人が明治三年に来日しました。副長がジョン・イングランド。この人たちの月給はどうかといいますと、エドマンド・モレルが八百五十円です。ジョン・イングランド副長は七百五十円です。機関士、釜焚きあたりでも二百円、百八十円という高給です。

それはどのぐらいの金額か比較しないとわかりにくいと思いますが、明治七年の日本官員録によりますと、三条実美太政大臣が八百円です。岩倉具視右大臣が六百円です。大久保利通参議が五百円。山尾庸三工部大輔が四百円、そしてあとで東京大学総長になります浜尾新が開成学校八等出仕で、わずか七十円です。東大の総長になる人が月額七十円、太政大臣三条実美が八百円、岩倉が六百円、大久保が五百円という時に、エドマンド・モレルは八百五十円、ジョン・イングランドは七百五十円という高給です。政府は出し過ぎましたから、工部省もあとで困った。こんなに出したら財政難になってしまうというので、仕事が終わったらクビを切って、さっさと帰ってくれという。お雇い外国人はプンプン不平を鳴らします。人を使うだけ使ってさっさと解雇するのはけしからん、契約違反だといって騒ぎますが、そのような状態が続きます。

そういう外国人を明治政府は実にうまく雇い入れて、仕事をしてもらって、鉄道をつくり、港湾をつくり、全国に灯台をつくり、橋梁をつくり、工場をつくり、鉄鋼所をつくり、大変な努力をするわけです。そういうお雇い外国人たちの中で、私がきょう申し上げたいと思いますのは、あとで明治天皇の御真影を描くことになるエドアルド・キョソーネという人です。

二、お雇外国人（彫刻師）E・キョソーネの業績

長靴のような形をしたイタリアの首都ローマから北のほう、日本でいいますと、大阪湾に臨む須磨、明石あたりの

ような景色のいいところにジェノバという町があります。フィレンツェからですと西へ汽車で一時間、ピサの斜塔で有名なピサ、そこから飛行機で北へ三十分ぐらい飛んだところがジェノバです。ジェノバの北、アルプスの麓にはミラノがあります。東のアドリア海にはヴェネチア（ベニス）があります。ジェノバの西にはモナコ公国があつて、そこからすぐフランスになります。エドアルド・キヨソーネはジェノバのすぐ近くの漁村で生まれました。小さいときからキヨソーネは絵をかくことが好き、彫刻が好きでした。三十七歳のときにミラノのアカデミア会員に推挙されて、パリ万国博に作品を出して銀杯を得るという有能な彫刻師であり絵画のできる人でした。

この人が明治元年（一八六八）に、イタリア王国の国立銀行にお札の彫刻技師として採用されました。お札の絵柄は細かくて、しかもきれいでなくてはいけない、しかも偽造されることが第一の要件です。イタリアの国立銀行で発行している紙幣をもっとよくするために、ひとつ研修してきてほしいと言われて、南ドイツのフランクフルトにあるドンドルフ・ナウマン印刷会社に派遣されます。彼は一所懸命その印刷工場で原版彫刻や印刷のことを勉強しました。

日本は明治になりますと、江戸時代に二百六十にも分かれていた各藩の藩札ではだめだということで、統一国家に相応わしい太政官札を発行します。内閣制度は明治十六年にならないとできませんから、初めのころは太政官制度です。太政官のお札を出すわけですが、これがすぐに偽造されてしまう。太政官札というのはこんな縦長のお札でありまして、大きさでいいますと、昔の聖徳太子の一万円札ぐらいのものを縦にして、太政官札を発行するわけです。しかしすぐに偽造されるので、これは困ったということで、太政官はドイツの有名なドンドルフ会社に五千万円分のお札を印刷してくれといつて発注するわけです。それが明治三年のことです。

そして、翌年ドンドルフ会社から送られてきましたのがゲルマン紙幣です。これはたいへん立派なお札です。どんなお札かというと、写真を持ってきましたけれども、写真ではとても小さくてご覧になりにくいと思いますので、黒

板に描かせていただきますと、菊のご紋章が上部の真中にあります。そして、すぐ下に金拾円と印刷してあります。その文字をめたい鳥の鳳凰が囲んでおりまして、その下に双竜。天皇のお顔を竜顔といいますが、天皇の象徴です。双竜が両側から一枚の看板をはさんで対峙している。この看板のところへ太政官紙幣局では赤い字で「明治通宝」と一つひとつ書き入れます。手間のかかる仕事です。こういうゲルマン紙幣がしばらく通用したわけです。

そのとき紙幣頭（しへいのかみ）だった得能良介という偉物がおります。明治三年に太政官大蔵省の紙幣頭になります。薩摩の出身です。この人がなかなか素晴らしい目の利く人でした。これからどれだけ流通が激しくなるかわからない日本の紙幣を、いちいち外国に印刷を頼んでいるようでは困る、日本でなんとかこれを刷れるようにしたらどうか、そのためにはそれを刷ってくれた技師と、刷った機械を一緒に日本に輸入したらどうかと考えます。そこで太政官にそれを願ひ出しましたら、太政官でもよろしかろうということになった。ゲルマン紙幣を印刷したのがたまたまイタリアからドンドルフ会社に向向していたエドアルド・キヨソーネです。そこでインクの技師、紙の技師、それから彫刻をするキヨソーネと機械一式、それら全部を雇うことになって、日本に到着したのが明治八年ということになります。

明治八年にエドアルド・キヨソーネが三人の技師とともに日本に到着いたします。一月十二日に横浜に上陸して、ただちに十四日には上京して、大手町にある紙幣寮に勤務いたします。そして毎日毎日、ほとんど日曜も休まずに、キヨソーネは日本の紙幣の原版となる彫刻をする。単に紙幣だけではありません。切手の原案。あるいは当時武士階級を廃しましたから、地券が必要になる。その地券の原本。証書類。そういうものをみな彼はドンドルフ会社で磨いた技術を日本に移転するわけです。そして一所懸命働きます。

ところが彼はたいへん人物画がうまい。最初に出た十円札は神功皇后、日本で女性の肖像が載ったのは神功皇后だけですが、神功皇后の肖像を描いたり、人物画を必ず紙幣には入れますから、肖像をかくのが非常にうまい。それを

見込んで、大久保利通がキヨソーネに自分の肖像をかくれと頼んだのです。そして明治九年、翌年には大久保利通像がちゃんとできあがります。遠くの方は見にくくいらつしやるかもしれませんが、皆さんが見慣れていらつしやる大久保利通像です。大久保利通が大礼服を着て、かたわらの机の上に片手をつけて立っている。これが最初の人物画像として、キヨソーネの銅版画でできあがります。それから次へ次へと、岩倉具視、三条実美、西郷隆盛、当時の政府要路の方々。それだけではありません。北白川能久親王とか有栖川熾仁親王とか、そういう皇族方のご肖像も彼は仕事の暇ひまに描いたり彫刻したりするようになります。

明治二十三年に彼が印刷局を退官するまでの間に、明治天皇、美子皇后さま、北白川宮さま、あるいは先ほど申しました有栖川熾仁親王、威仁親王、そのほかに三条実美、大山巖、木戸孝允、得能良介という方々、全部で二十二名の方々の肖像画を描きます。そして、とうとう彼はイタリアに帰らずに明治三十一年（一八九八）の四月十一日に麹町区平河町の自宅で六十六歳で亡くなります。四十三歳で日本に生ましてから六十六歳まで、二十三年間、本当に日本のために彼は尽くします。

そこで、なぜ彼は全く見も知らぬ日本に来て、日本にそんなになじんだのかということの秘密をすこし申し上げたいと思います。

大蔵省紙幣頭、明治十年十二月に印刷局と改称されましたので、印刷局長ですが、その印刷局長になりました得能良介がキヨソーネを連れて足かけ四か月の旅に出ます。旅といっても単なる遊覧旅行ではありません。大蔵省の印刷局の仕事として、各地の名宝、熱田神宮とか正倉院とか法隆寺とか、あるいは京都の諸社寺の宝物。それだけではありません。民間に伝わっているいろいろな器物、宝物、そういうものをよく調査し、写真に撮って、それをこれからの大蔵省の印刷局の仕事の参考にしようという目的で、明治十二年の五月一日に大手町の印刷局を十三人の大部隊で出発いたします。その時に得能局長はキヨソーネを連れていきます。ほかには写真師、通訳、鑑定士とか、いろいろ

な技師たちです。

もちろん汽車はありません。明治五年に新橋から横浜までは汽車は通じましたけれども、東海道線はまだありません。東海道線が開通するのは明治二十二年です。ですから、得能局長が旅に出た明治十二年には、まだ東海道の汽車はないのです。したがって、得能良介は十二人の技師たちを連れて大手町を出発して、徒歩で新宿を通り八王子を通って山梨県に行きます。山梨から富士川をずっと船で下る。あの急流を下って興津に出て、それから静岡、東海道を名古屋に下って、名古屋城や熱田神宮を参観しお参りして、それから桑名を通って伊勢神宮に参拝し、更に奈良、和歌山、堺、京都。京都には三週間も滞在して各社寺を研究します。それから草津へ出て、草津から琵琶湖を船で米原に抜けて、米原から今度は中山道を通って諏訪に出ます。諏訪から小諸を通って栃木県の日光に出る。日光の宝物を拝見して東京の大手町に帰る。百四十二日にわたる大旅行です。

出発したのが五月一日、そして帰り着きましたのが九月十九日。その間に京都ではキヨソーネが風邪をひいて熱を出す。すると得能良介局長は京都中探して外国人のお医者さんを見つけてきて、彼を看病し、そしてあとから追い掛ける。そういう親切をする。

とくに皆さんにご披露したいと思ひますのは、大手町を五月一日に出発して、五月三日に八王子で一泊したところでキヨソーネと得能良介がいろいろ話し合っている。それが得能良介が書き残した『巡回日記』という、大蔵省の印刷局から明治二十年に出た記録の中にまことに見事に出ています。読んでみます。

「三日（明治十二年五月三日） 土曜日。夜来ヨリ雨降り今朝ニ至リテ止マズ。八王子駅ニ滞留シ近傍の機織女工ヲ見ル」。八王子は昔から機織りの盛んなところでしたから、女工たちが一生懸命機織りをしているところを見学した。そして「ソノ進歩ヲ賞シテ旋ル。」ところで「雨中事ナク、キヨソーネ氏ト対座閑話ス」。雨が降り続いて所在ない。無聊なものですから、得能局長はキヨソーネと向かい合つてすこし世間話をした。

「余曰ク、凡ソ画ヲ造リ図ヲ製スルニ実境ノ趣味ヲ解セズシテ、徒ラニ形似ヲ論ゼバ、恐ラクハ筆ヲ枉クルノ憾ナキコト能ハズ。石楼瓦屋ノ重畳タル必ズシモ欧州ノ光景タラズ。峰巒ノ起伏シ雲烟ノ揺曳スル必シモ支那ノ景色タラズ。要スルニ精神ヲ皮相ノ外ニ得テ始メテ與ニ畫ヲ言フベキノミ」。そこでキヨソーネ君、あなたがわが日本の「山川ヲ跋涉シ、我が国ノ神社、仏閣、官民秘蔵ノ古器、古画ヲ見、人情、風俗ノ如何ヲ審ラカニセバ、他日、筆ヲ執ルニ當ツテ必ズ大イニ覚悟スル所ノモノアラン。」私がこの旅行に君を伴うのはその意実にごここに有るなり、とキヨソーネに語つたところが、キヨソーネは首肯いて心からそうでございますと言つて謝したといふのです。いい情景ですね。

さらに進んで正倉院に参ります。「六月四日午後驟雨。会所坊ニ至リ正倉院御物ヲ拝観スルニ、古書アリ、陶器アリ木具アリ漆器アリ、金銀銅鉄器アリ、石器アリ羽毛皮革ノ器アリ、竹ノ器アリ寄木ノ器アリ、而シテ其ノ製作ノ巧緻精妙ナル、体格文様皆高尚ノ趣ヲ得、一トシテ人目ヲ驚カシ欽慕ノ思ヒヲナサシメザルナシ。」けだし、古人は器物一つ作るにも必ずやその精神巧力ヲ極めてこれに従事して、すこしもいかげんなことはしなかつた。ところが最近のものとはみんな手を抜いてあつてよくない。これは今日でもそうです。昔の人のものは本当に小さなお椀一つ、お膳一つでも、非常に精神が込めてある。近ごろのは大量生産といふことで、技術がどんどんだめになつていく。そういうことを書いています。

まだまだありますが、このぐらいにします。つまり、キヨソーネという人は得能良介局長のこの親切にいわば感動したわけです。ですから、明治十六年に得能良介がまだ五十九歳の若さで、在任中に突然病氣を發して亡くなりまして、青山墓地に祭られましたときに、キヨソーネは得能局長のお墓を設計しています。心から得能局長を父と仰ぎ師と仰いで得能局長に尽くしています。つまり、雇う側と雇われ人との間がこんな親密な關係になつてゐることは、明治の、それも忙しい時代の中で感動すべきことだと思ひます。

キヨソーネはそういうことで日本の状況にとつぷりと漬かりまして、日本が好きになるわけです。そのキヨソーネに対して明治二十一年宮内省から明治天皇の御真影を描けという命令が下ります。

三、明治天皇の「御真影」製作の経緯

『明治天皇紀』によりますと、「明治二十一年一月十六日。宮内大臣子爵土方久元。印刷局雇伊太利國人キヨソーネをして天皇の御真影を謹写せしむ。天皇撮影を好みたまはず」とあります。明治天皇は写真を撮ることが非常にお嫌いで、明治三年と四年の時のお写真しか残っていない。明治三年のお写真は、元服した男子成人の用いる烏帽子をかぶりになって、直垂をお召しになり、袴をつけて座っていらつしやるお写真です。明治四年には、断髪なさいまして、髪を半々にお分けになって、蛇腹のついたフランス式の洋服をお召しになって座っていらつしやる写真。その二つしか写真はない。実は、天皇陛下のお写真がないと、外国の使臣が来てどうしても写真が欲しいというときに困る。にも拘らず、「御真影として存するは、旧制の佛蘭西式軍服を召したまへるものを始め、皆十数年前の撮影に係り、外国皇族・貴賓に贈与するに適せず」。伯爵伊藤博文が宮内大臣になるや、しばしば明治天皇にお願ひ申し上げましたけれども、天皇はお許しにならなかつた。そこで土方久元が大臣となるや、「思へらく、天皇の知りたまはざる間にひそかに拝写するに如かず、その責任は臣これを負はんと。よりて式部官長崎省吾、侍従子爵堀河康隆等と協議し、侍従長侯爵徳大寺実則に諮り、以て機を待つ」。

そして明治二十一年の一月十六日に弥生社というのは警察官が宴会をするためにつくった集会所のようですが、これが初め本郷の向ヶ丘にあったのが芝に移って、その弥生社に「明治天皇、行幸のことあるを好機と為し、キヨソーネに命じて拝写せしめんとす。キヨソーネ命を拝して大いに感激し、御陪食に際して次室に候し、襖を隔てて正面より龍

顔を仰ぎ、御姿勢・御談笑の微に至るまでことごとく拝写して余す所なし」。コンテでスケッチしたわけです。

キヨソーネはこれを今度は丸木利陽という写真師に何回も撮らせませす。もうちよつとはつきりとか、もうすこしばかりしてとか、何度も指示をして、ようやくできあがりしました。

「既にして原画成り、之れを撮影す。神彩奕々、聖帝の偉容巖然として真に迫る。久元等大いに喜び、以為らく、以て観覽に供するに足らんと。直に事由を奏して之を奉呈し、且、予め勅許を請はざるの罪を謝して命を待つ。天皇之れを覽たまひ、黙して一語も可否を仰せたまふことなし」。そこで、「久元以為らく、御真影真に麗し。これを覽たまひて一語もあらせられざるは何の故かと。聖意を忖度するに由なく、密かに惑ふところあり」。

「たまたま某国皇族の御真影の贈与を請ふあり」。外国の皇族が天皇陛下の御真影が欲しいと言ったので、久元はその御真影にぜひとも天皇陛下のご署名をいただきたいといつて、キヨソーネがかいた御真影、写真を天皇陛下のところにおさるおさる持つていつて、ここに「ご署名いただきたいと申し上げたわけです。「久元此の御真影に署名あらせられんことを請ふ。天皇直に親署したまふ」。天皇はすぐに睦仁とちゃんとお書きになった。「久元大いに喜び、親署は即ち勅許なりと意始めて安んず。のち天皇の御真影としてあまねく下賜せられたるものはこの原画に基づくものなり」。

キヨソーネのことは、ご晩餐をいただいたとか、ご褒美をいただいたとか、いろいろなことが『明治天皇紀』四巻にわたつて八か所ほど記録されて居りますけれども、明治二十一年一月十六日の記事、つまり、キヨソーネが御真影を描いたことが手に取るように詳しく生き生きと書いてあります。

翌年明治二十二年が大日本帝国憲法の発布、その翌年の明治二十三年に教育勅語が発布になります。教育勅語の発布に合わせて宮内省、内閣は全国の官庁と官立の学校ならびに全国の公立小中学校に明治天皇の御真影と美子皇后さまの御影をあわせて、そして教育勅語も添えて全国に配つたわけです。以来、昭和二十年八月の敗戦に至るまでの日

本では、小学校で私ども元旦の四方拝とか二月十一日の紀元節とか、四月三日の神武天皇祭という三大節の祝祭日には必ず勅語奉読式がありました。

奉安殿に御真影と教育勅語がいつも格納されています。式に先立って校長先生がモーニング姿に白手袋をつけて講堂の正面に御真影をお移しする。そして幕が垂れている。そこへ六、七百人の私ども子供が講堂に整列して、式の開始の合図を待つ。教育勅語の奉読式が始まる前に、まず明治天皇の御真影と皇后さまの御影に対して、私どものころはもう昭和天皇さまになっておりますけれども、明治時代ならば明治天皇の御真影を拝礼するわけです。そして教育勅語の奉読がある。これはそんなに長くないのですが、田舎の寒い講堂で聞いていますと、みんな下を向いているものですから、鼻が出てくるので、よく鼻をすする音が聞こえてくる。「こらっ、しっ」といって怒られたことが何度かあります。そういうふうにして勅語奉読式と御真影の拝礼をしました。

御真影を拝礼するということは、明治天皇、美子皇后さまがこの場にいらっしやる、あるいは直接宮城にお伺いして天皇陛下に朝覲する、ご挨拶をするのと同じことです。そういうことがずつと行われていたわけです。

ところで明治二十四年に一つの事件が起こります。第一高等中学校といえますから、のちの第一高等学校、いまの東京大学教養学部です。それがまだ本郷の弥生町にあった頃です。有名な無教会派の基督者の内村鑑三が一高の講師でした。ところが勅語奉読式のときに、彼は御真影に対して敬礼をしなかったというところで、どこから漏れたか知りませんが、当時の東京帝国大学の哲学科の井上哲次郎博士から、それは国賊だ、天皇の御真影を拝することを拒否するとは教官たる者けしからんといつて大攻撃を受けて、とうとう内村鑑三は一高の教官を辞めさせられて、北陸から北海道へと流浪して、とうとう病気になる。それを看病していた夫人も心労のあまり早く亡くなってしまふ。非常な苦勞をするわけです。これは不敬事件といえますけれども、私も内村鑑三の不敬事件はそのとおりにかと思っております。

昭和六十一年に日本を守る国民会議で『新編日本史』という教科書を刊行することになり、そのとき私も九人の著者の一人として執筆に加わりました。その『新編日本史』がまだ公表される前に朝日新聞が復古調の教科書だとか、天皇に全部敬語をつけているとか、「逆コース」の教科書などとスクープ記事を書きましたら、毎日も読売もみなこれにならって、大騒ぎになったことがあります。昭和六十一年夏のことです。

その『新編日本史』の近代文化史のところ、いまは文京区、昔は本郷区の湯島小学校の、勅語奉読式のと、羽織、袴の子供たちがみんな御真影に頭を下げている写真を左上方に載せて、そして下のほうに注をして、いわゆる内村鑑三不敬事件の解説を書きました。「明治二十四年（一八九二）、第一高等中学校において教育勅語の奉読式に際し、教官内村鑑三がキリスト教徒として最敬礼を拒み、ついに職を追われた。これを内村鑑三不敬事件という。」と書いたのです。勿論、文部省の検定も通りました。

ところがその教科書が出て間もなく、高千穂商科大学名誉教授の関根文之助さんという方が「世界日報」に、「『新編日本史』は本当にいい教科書だ、『新編日本史』の役割に期待したい、日本人形成のためには神話も必要だし、こういう歴史教育でなくちゃいかん」といつて、たいへんお褒めの記事を寄せられました。その中に、教育勅語奉読式の解説はちよつと間違っているとお書きになった。

どう書いていらつしやるかといえますと、『新編日本史』の教育勅語のところ、事実と違っているところがある。それは教育勅語と内村鑑三とのことが、いわゆる「内村鑑三不敬事件」として扱われていることだ。教育勅語は当時、天皇陛下が「睦仁」といちいち署名をされていたので、時の第一高等中学校校長木下広次が、始業式において奉読したのち、もし天皇のご直筆を拝したい方はご自由に拝してくださいと言った。そこで内村は「ご自由に」とおっしゃるのだからというので、天皇のご署名を校長の教卓のところに見にかずに帰っただけのことである。別に不敬の行為をしたわけではない。ただそれだけのことが全く誤った事実として伝えられたためであると言っておられる。

これは大事なことで、まだお亡くなりになっていなければもう一度確かめたい、伺いたいと思っています。井上哲次郎という東大の哲学の教授は、その後たいへん不評判になりました、とうとう東大を辞めたあと、世間からこうこうたる非難、御用学者だといって抹殺されるような末路をたどられました。

とにかく、明治天皇の御真影、ならびに教育勅語についてそういうことがありますので、一つご紹介しておきます。御真影のことにつきましては、いろいろ論文を探しました。村尾次郎博士はこの明治神宮の『明治天皇詔勅謹解』『明治天皇のみことり』、とくに大きいのは、明治神宮で昭和五十一年に『大日本帝国憲法制定史』という八百七八ページもある本をお出しになったときの執筆、編集委員でいらっしゃいます。委員長が大石義雄博士、委員が副島廣之権宮司という方々です。その村尾次郎博士が昭和五十一年の「神道史研究」に、明治天皇の御真影の「真」というのはどういう意味か、御真影といえ、それは天皇のご肖像に決まっている。皇后さまのことは御影という。「真」は入らない。天皇だけが御真影なのだといって、その思想的な深みを書いていらっしゃいますので、ご参考になさってください。

明治二十一年にキヨソーネが伺候して、大急ぎでスケッチして、それを丸木利陽が写真にとつて、何度も直させてできあがった御真影。つまり、帽子はかたわらに置いて左手に剣をお持ちになって勲章を佩用されてお座りになっている明治天皇、いま明治神宮の宝物になっておりますが、あの明治天皇のご肖像こそ最も国民の目に焼きついている御真影といわなくてはいけないと村尾博士は書いておられます。時に明治天皇御年三十八歳。明治天皇が最も充実しておられた。ご賤祚になりました十六歳、十七歳の青年時代とはまた違った、本当に充実して、大日本帝国の天皇として、諸外国に向かわれた天皇の御真影は、今明治神宮にありますあのご座像でありますので、ご紹介しておきます。

四、ジェノヴァ東洋美術館の来館者名簿とキヨソーネ

戦後、昭和四十六年にジェノバ市立の東洋美術館が完成し、キヨソーネ「コレクシヨン」一万四千点が公開されました。私は平成元年八月、単身の身軽さ、この美術館を訪ね、偶然、大変重要な史料を発見しました。お手元の刷り物をご覧下さい。

キヨソーネは明治三十一年に亡くなりますが、明治天皇から頂戴した花瓶とか宝物とか、彼が東京在任中に集めた浮世絵二千点、刀の鑊六百点、キヨソーネは刀の鑊の彫刻が非常に気に入ったのですが、そのほか、埴輪もあれば、仏像もある、大変なものです。それを彼の遺言によって、翌年、九十六箱に詰めて船便でジェノバへ送りました。ジェノバ市では一時それを展覧したそうですが、昭和十五年に第二次世界大戦が欧州で勃発しましたので、教会の地下室に深く埋めて隠しておきました。それを戦後掘り出して、新しくジェノバの丘の上に、日本式の連子格子の美しい美術館を建て、キヨソーネのコレクシオンを納めたのです。

私が一人で伺いましたのは八月末の日曜日だったものですから、「日曜日に申し訳ありません」と申し上げたら、フラベッティ館長さんが、「いや、日曜だから一般の客がおいでにならないので、却って結構です。どうぞどうぞ」と言ってくれました。学芸員の方が札幌に来たことがあってちょっと日本語ができますので、助かりました。イタリア語は一生懸命勉強したつもりですが、全然私には通じませんで、日本語で学芸員の方の通訳を通してフラベッティ館長と話をしました。

ずっと案内してもらったうえに、地下室を案内してくださいました。地下室に行きましたら、明治天皇から賜った菊の御紋章のついた花瓶やなにか、まだ戸棚の中に格納してありました。一回り見ましたあと、ロッカーの上に本当

に無造作に置いてあるのが、来館者署名簿でした。明治三十八年から書いてありました。ほこりにまみれています。ちよつと失礼といつて見せてもらったら、明治三十八年に開館したときにイタリア国王がおいでになった。それから、日本の潜水艦とか巡洋艦とか、海軍の艦船が遠洋航海に行かれる。その艦長さんたちがみな何々艦長なのにだれそれと書いていらつしやる。

もうすこし見ていきましたら、李方子妃殿下りまごの署名がありました。李方子妃殿下は明治三十四年十一月のお生まれで、昭和天皇さまは同年四月二十九日のお生まれですから、半年違いですね。お亡くなりになったのが平成元年です。昭和天皇さまは昭和六十四年の一月七日でいらつしやるから、それが改元されて平成元年になったので、お亡くなりになったのも昭和天皇さまに少し遅れてということになります。八十七歳でいらつしやいました。

李方子妃殿下のお父様は、ご承知かと思いますが、梨本宮守正王、お母様は鍋島直大侯爵なほひろの次女の伊都子いっごさまです。こういうお生まれですが、日韓併合が行われまして、李王家の最後の皇太子の李垠の奥方になってほしいということ、韓国の李垠殿下の妃殿下になられたわけです。もちろん日本にずっとお住まいになっていたのですが、日本が第二次大戦に敗れまして、韓国が独立してから非常に苦労なさったと思います。しかし、李方子妃殿下はご主人が亡くなりまして、李家から離れることをせずに、むしろ韓国においてになって、韓国障害児の母と仰がれているほどの福祉事業に献身なさって亡くなった方です。この李方子妃殿下の署名がありました。

そういうふうに着名を見てまいりましたところが、なんと八百五十字、千字に近い文章が書いてある。これは大変だと思ひまして、読んでみたら大変な文章なので、私は早速カメラで二、三度写しました。とても自信がなかつたものですから、フラベッティ館長さん、これを館長室まで持ち出してくださいませんかとお願ひして、館長室でもう一度写真を撮りました。接写装置を持ちませんので自信がありません。「おそれいりますが、私、筆写しますので、二十分程時間を貸してください」「どうぞどうぞ」というわけで、大急ぎで大学ノートに写しました。そして、帰って

から下手なワープロで打ち直したのが、お手元の史料です。

池田敬八は大蔵省第九代の印刷局長で大正六年から昭和三年まで務めた大局長です。この池田敬八局長が訪問先の署名簿にこれだけの文章を書かれたのです。

「千九百二十三年（大正十二）九月三日官命ヲ以テ当國巡遊ノ途、特ニ当地ヲ過リテ当館ヲ訪フ。蓋シキヨソネ氏ハ曩ニ我局ニ聘セラレ彫刻印刷ノ術ヲ伝習スルコト懇篤親切ヲ極メ、我邦今日紙幣製造ノ確立シテ容易ニ偽造贗造ノ餘地ヲ與ヘサル所以ノモノ力ニ俟ツコト大ナルモノアレハ也。聞ク氏ハ其獨特ノ技能ノ外特ニ我邦美術ノ□、（欠字）なつておりました。あとで埋めようとしたのでしょう。宣揚か昂揚か。」「揚ニ力メ尚其蒐集ヲ謀リ、其鑑識力、斯道者ヲ驚カシタルモノアリ、殊ニ鏢ニ於ケル鑑識力ハ確ニ一頭地ヲ抜ケルモノアリト。今本館ヲ訪フニ及ヒテ其説ノ空ナラサリシヲ確メ且各般ノ美術品ニ多大ノ趣味ヲ持シ、遂ニ一個人ノ力ヲ以テシテ斯ノ如ク多数ノ蒐集ヲ為シタルコトニ驚キタリ。勿論多大ノ資力ヲ以テセハ尚多大ノ蒐集ヲ為シ得タランモ知レサレトモ、一箇ノ投入トシテ私財ヲ投シテ此蒐集ヲ為シ日本美術ノ保存ニ力メタルコト一主張一識見アルニアラスンハ能ク此ノ企ヲ為スコトヲ得ンヤ」。ここまでは大蔵省印刷局で雇つたキヨソネさんがどんなに日本のために尽くしてくれたかということです。

そのあとが面白い。「或ハ我邦美術ノ海外ニ持チ去ラレタルコトヲ歎スルモノアリ。予モ聊其感ナキニアラサレトモ、若シ氏ニシテ此企ニ出テサレセハ或ハ恐ル日本ニ於テモ散佚遂ニ其影ヲ止ムルコトナカランコトヲ」。これは意味深長です。最後の署名にありますように、これは九月三日ジェノバの博物館のキヨソネの像のもとで第九代印刷局長池田敬八さんが書かれたわけです。キヨソネさんがこれをジェノバに運んでくれなかったならば、日本でこれだけの宝物がちりちりになつて影も形もなくなつていたかもしれないということを書いておられる。

ところが、池田敬八局長、知るや知らずや、この署名の二日前、九月一日に関東大震災が起こつた。大正十二年の

九月一日午前十一時五十八分に起こって、東京と横浜、京浜地帯は壊滅状態になった。もちろん大手町の印刷局、キヨソーネが残した彫刻原版から何から何まで全部燃えてしまつて、灰塵に帰した。ですから、持ち出していたものもわずかに残つた。こういう奇遇といえますか、そういうことが起こつた。

あとは印刷局長が、こういう機会にキヨソーネさんに大変な功績があつたということ、したがつて、追而書きのところで、毎年、青山墓地で印刷局の亡くなつた人のお祭りをするときには忘れずに春、秋、キヨソーネさんのお墓をちゃんと整えて花を供え「其霊ヲ祀ルコト欠カサルコトヲ併セテ附記ス」といつて、イタリアの人々にわが日本ではキヨソーネさんを春、秋のお祭りにちゃんとお供養しているんですと書いてある。たいへん懇切な文章です。JR中央線の市ヶ谷駅で降りて北に左内坂を上つたところに、「お札と切手の博物館」といつて大蔵省の印刷局記念館があります。そこにはいろいろな記録が残つていますけれども、この全文を写したのは私が初めての方法です。そういうことで皆さんにこれを進呈申し上げます。またよくお読みいただければありがたいと思います。

明治天皇の御真影をもう一度ご覧いただきたいと思ひます。これがキヨソーネがコンテ画で原画をかき、何度も修正して、真に迫る、あるいは、西洋人でありますから、スペインの十七世紀に出た大肖像画家、宮廷画家のベラスケスのような傾向をキヨソーネも引いていることは間違いないでしょう。やはり西洋人ふうだ。あごのへんとか鼻筋のあたりがちよつと西洋人くさい。

西郷隆盛の肖像画もそうです。キヨソーネが描き上げたのが明治十六年。顔の上半分は西郷隆盛の弟の従道の顔を借り、下半分は甥の大山巖の口元を借り、そして、得能良介が生きていますから、得能良介が一所懸命助言してでき上がったのが、キヨソーネの有名な西郷隆盛の肖像です。これは私は大好きです。朝夕、書齋に掲げて拝んでいます。西郷隆盛の鼻筋、口もと、あごのへんがちよつと西洋人っぽい、硬いなという気はしますけれども、これはやはりキヨソーネの描いた傑作だと思ひます。

明治天皇の御真影を批評するのは畏れ多いことですが、あの謹厳な明治天皇の御真影がキヨソーネによって描かれたことを有難く思います。日本にもたくさん画家がありました。しかし、キヨソーネに描かされたということは、キヨソーネがそれほどまで朝廷のご信頼を受けたお雇い外国人だった証拠です。四十三歳以降、六十六歳までを日本で過ごし、日本に骨を埋めた人物であったということを知っていただきたいと思えます。これをもって私の拙いお話を終わることにいたします。どうもご清聴ありがとうございました。